英語教育実践研究会

授業実践研究

第 6 号

巻頭言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第 6 回研究会事例発表 1 ・・・・・・・・・2
第 6 回研究会事例発表 2 ・・・・・・・・・4
会員の広場 ・・・・・・・・・・・・・・・・6
2022 年度研究会活動報告 1・・・・・・・・・7
2022 年度研究会活動報告 2・・・・・・・・・8
会計報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
2023 年度研究会のご案内 ・・・・・・・・・9
編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・9

＊＊＊＊ 巻　頭　言 ＊＊＊＊

英語教育実践研究会への想い

池田るり子
（産業能率大学）

2023 年新年を迎え、今年こそは、英語教育実践研究会の皆さんと気楽にお会いできることを期待しながら、この研究会を通して、学ばせていただいた「大学での英語教育」について改めてこの 10 年間を思い起こしていた。

昨年は、浅野享三先生の「リーダーズシアターメソッド」ワークショップをこの研究会で、しかも対面式での実施に至った。コロナ禍の中、対面式のワークショップ実施にあたり、研究会運営メンバーで話し合いを重ね、浅野先生のボランティア精神と会場となった戸板女子短期大学の中村公子先生のご尽力により、私の個人的な長年の念願が叶い、参加できたことが最大の思い出になった。改めて、対面式で実施するこの研究会の在り方を感じるきっかけとなった。

このコロナ禍の中で、多くの研究会や学会が Zoom で実施されており、遠くへ出向かなくても気軽に参加できるメリットはあったが、3 年間という長いスタンスになってくると、「人は人を求める」もので、直接会って、何気ない雑談の中から、得られる情報や思いを伝えるプロセスの大切さといろいろな人と会って話をしたい気持ちが倍増してきた。この研究会の特徴は、アットホームな会なので、研究発表の後、皆さんで机を囲んで語り合う時間がある。ここが、他の研究会と大きく違うところで、英語教育に悩んでいた私にとっては居心地のいい場所であった。

年末、たまたま研究室の荷物を断捨離しようと片付けていたところ、重い段ボールが出てきた。「何だろう」と開けてみると、10 年程前にこの研究会へ参加するきっかけとなった勤務大学での「英語再学習プログラムプロジェクト」メンバーとして悩んでいた時に購入した本だった。改めてどんな本を購入したんだろうと箱から出してみると面白い本がたくさん出てきた。

その中に、斎藤兆史先生の『日本人と英語－もう一つの英語百年史』があり、新年早々、読み直してみると、改めて、「日本人がどう英語と関わり学んできたか」、日本の英語教育の原点や変遷を学び直せた感じがした。

明治後期から平成までの英語教育の取り組みが書かれており、最終章では、これからの小学校英語教育のゆくえや英語教育改善策がつづられている。

この本では、平成までで終わっているが、大学英語教育はこれからも時代と共に進化するものであり、改めて、この研究会へ参加しながら、自分自身の英語教授法も進化していたと実感した。まだまだ、終わりの見えない長いトンネルに入ってしまったような悶々とした日々が続いているが、新年も皆さんと協力しながら、英語教育への語りの場で、お会いできることを楽しみに、また、多くの方が参加していただける会になることを祈りたい。

2022 年 10 月 9 日、オンライン開催

2022 年第 6 回英語教育実践研究会

事例発表 1

洋楽を用いた英語授業：問題点とその解決

須永 豊

（日本大学）

はじめに

英語の授業で洋楽の歌詞を教材として用いた経験がある方も多いと思われる。実際、洋楽を題材とする教科書や書籍は数多く出版されている。拙著『歌って英文法』（幻冬舎 2021）もその一つであるが、その主な特色は、初習レベルの学習者が学ぶべき「基礎の基礎」から、英語を読み・書き・聴き・話すための比較的高度な実践・練習問題までを扱っていること、文法事項を説明する例文のほぼすべてが 22 曲の歌詞から引用されていることである。本発表では、『歌って英文法』を教科書とする授業で教員が向き合う問題点とその解決を考え、報告する。

『歌って英文法』執筆の経緯と特色

筆者が基礎から実践までを歌で学ぶ授業に至ったきっかけは、英語学習へのモティベーションが低く基礎がしっかり学べていないためになかなか実力がつかない学生が増え続ける中、その状況を変えるリメディアル教材の必要に迫られたことであった[1]。アフリカ系アメリカ文化研究（特にブルースやジャズ）と英語教育という「二足の草鞋」を履く筆者は、誰でも楽しめる音楽を利用し、楽しみながら文法を学ぶ授業に辿り着いた。継続なしで効果はあり得ず、楽しくなければ継続できないからである。そして、楽しいだけの授業に終わらないよう試行錯誤を繰り返し、必要不可欠な 22 の「ターゲット文法」を絞り込み、それぞれを理解し運用練習するのに適する 22 の楽曲を厳選した[2]。

『歌って英文法』は主に、英語歌詞の一部を空欄にした日本語訳付きワークシート、一行ごとの文法解説、そして「ターゲット文法」に特化した練習問題で構成されるが、基本文法の確認・定着が不可欠であるため、〈語〉〈句〉〈節〉などの英文構成要素や、品詞、時制、人称代名詞の使い分け、be 動詞や一般動詞の語形変化など、必要最小限の文法事項とその練習問題を「準備１～３」としてまとめ、収録している[3]。

22 曲のそれぞれに、集中的に学ぶ「ターゲット文法」が設定されているが、どの曲も様々な文法事項を含むため、解説や練習問題の中で、他の楽曲の歌詞も例として頻繁に引用される。したがって学習者は、一つの楽曲（とそのターゲット文法）を集中的に学びながらも、同時に他の楽曲（や他の文法事項）を部分的に「予習」「復習」することになる。多少大げさに言えば、『歌って英文法』は 22 曲の表現から成る小さな「文法コーパス」と言えなくもない。

掲載楽曲の多くは世代を超えて多くの歌手がカバーするスタンダードで、厳選された複数の推奨音源を聴き比べることで、異なる声質や発音に対応できるリスニング力を養成できる。授業でもスピードやアレンジの異なる複数のヴァージョンを再生し、言葉使いの違いなどを解説している。この「聴き比べ」にはかなりマニアックな内容も含まれ、本書の発展・応用部分と言える。発音に関しては、全曲で「リスニングと発音のアドバイス」を設けるとともに、すべての行において発音アドバイスを掲載している。

『歌って英文法』を使った授業の流れ

15 回の授業のうち、ガイダンスなどを除く 11 回は、毎回一曲の歌を用いて行う。ワークシートの空欄を少しずつ埋めていくのが主な活動であり、学習者同士が助け合って楽しむグループワークが極めて重要となる。個人での部分英作文や聴き取りとグループでの相談協力を繰り返し、最終的にグループで 1 つの答案を作成する。

授業の流れは（１）前回の採点結果発表と講評→（２）「ターゲット文法」の説明→（３）ワークシート上での個人での部分英作文→（４）聴き取り・書き取りと修正・グループ答案作成→（５）解説→（６）発音練習、である。

問題点とその解決

[1] 教科書に解答・解説がすべて載っていて、授業は成立するか

授業前に解答・解説を見てしまうと、授業での英作文や聴き取りの楽しみがなくなってしまう。そこで、初回のガイダンスで、予習は敢えてしないよう指導した[4]。授業で文法を理解することが「予習」、学んだ表現を実際に使う（歌う）ことが本当の「授業」、教科書は確認・復習用、と位置づけた。音源を繰り返し聴き、予想して書いた表現を修正し、グループで答案を完成させていく過程を多くの学生が楽しんでいる。

[2] 歌（音楽）を使うことに対する抵抗

歌を用いた授業を楽しんでいる学生が多い一方で、「日常会話を使ってほしい」という意見を時折聞く。要するに「普通の」教材を使ってほしい、ということなのだろう。一般的なテストで使われるような「標準的な」英語を求める要望の裏には、「楽しさ」よりも「スコア」を優先する傾向や、テストのために勉強するのが「普通」という固定観念があるように思える。

特有のメロディーやリズムがある歌は確かに独特な教材と言える。そこで、授業の流れ（４）の段階で教員が歌詞の表現を会話調・朗読調で発音して聞かせたり、（６）の発音練習でも、話すようにつぶやいたりシャドウイングをさせ、歌の歌詞も「日常会話」であることに気づかせている。現実の会話にも多少の「雑音」はあり、歌のメロディーやリズムも学習の大きな妨げにはならない。むしろ、英語を使う機会が少ない日常に音楽という形で英語を取り込み、気軽にインプット・アウトプットを繰り返すことができる「メリット」の方がはるかに大きい。

[3] 若者の音楽嗜好とのギャップ

「自分の知っている曲をやって欲しい」という要望を毎年のように聞く。授業で扱う曲はあくまで基本文法をバランスよく学ぶために厳選していること、広く永く歌われるスタンダードを知ることで世界の人とつながる可能性が広がることを説明し、授業で養った力を自分の好きな曲の理解に活かすよう促している。同じ曲や表現を次々に新しい形で歌い継ぐ伝統や文化を若い世代に継承できれば、と考えている。

[4] 多様化する学生とその習熟度

たとえ習熟度別クラス編成をしても、学生の能力・意欲・関心には幅があり、どうすれば全体の満足度を得られるかという悩みは尽きない。しかし、豊富な楽曲のバラエティーと、極めて基礎的な文法からかなり高度な聴き取り練習までをカバーしていることが、多様化するニーズへの対応に役立っていると思われる。授業ではグループで楽しむことを最重要視し、そこで基礎の大切さに気づいた学生が、いつでも自分で再スタートすることを期待している。

今後の課題

英語そのものや発音に対する抵抗感、グループ活動が苦手な学生の存在など、歌を使っても必ずしも解決しない課題もある。それでも時折「英語なのに楽しい」というコメントをもらうことがある。このような意見の裏には、英語（や大学の授業）はつまらないのが普通、といった思い込みがあるのだろう。コロナ禍の影響もあり、学生の基礎力がますます低下していることを痛感する日々、「スマートフォンはバッグにしまって、代わりに辞書を出しましょう！」というのが授業開始時の口癖のようになっている。

---

[1] 須永　豊「大学における『学び直し英語』の一試み：授業実践報告」（2013）日本大学生物資源科学部　人文社会系研究紀要　第 10 号。

[2] ジャズのスタンダードを中心に、アニメ映画の主題歌「銀河鉄道 999」やポップス、カントリーなどを含む。無料で利用できる Spotify のプレイリストを用意し、Twitter で追加情報を発信するなどし、復習に利用するよう促している。（https://linktr.ee/yutakasunaga）

[3]『歌って英文法』 pp. 20-70.

[4] 予習として「準備１～３」を読み、楽曲を前もって聴いてみるのは良い、と指導している。

2022 年 10 月 9 日、オンライン開催
2022 年第 6 回英語教育実践研究会
事例発表 2

看護の中の日常英会話と異文化理解教育に関する考察―「伝える私」から「対話する私たち」への内省を促す試みから

平田 亜紀
(常磐大学)

１．はじめに

本稿は看護学部生を対象に取り入れたコミュニカティブな英語の実践報告である。

２．常磐大学の全学英語教育

常磐大学では 2018 年度以降、全学部で共通のシラバスを採用している。全クラスで同一内容を実施することが前提だが、実情は習熟度や学生の関心を考慮し各担当者が評価項目に影響のない範囲で調整をしている。コマ数は 6 コマあり（英語 I～VI）うち、I および II はリメディアル要素が強く、III と VI は生活言語としての英語に焦点を当てている。高度な英語の運用能力を身に着けることを目的とした EAP(English for Academic Purpose) や ESP（English for Specific Purpose, English for Specific Academic Purpose）ではない。

３．全学英語教育の課題と対策

全国的にみても全学英語教育の科目担当者は難しい課題と直面しているようだ。大学コンソーシアム京都（2015）の報告では、全学共通科目に対する学生の一般的な好奇心の乏しさに加え、英語学習においてはモチベーションの低さや、「英語嫌い」を通り越して「恐怖」と感じる学生がいること、語学力に幅があることなどから教材選びも授業運営も英語専攻学部のそれとは違った苦労を味わっていることが伺える。

報告者も、比較的学力が高い看護学部生の英語 I および II を担当することが決まったときに、定められたリメディアルとのミスマッチの解消をどのようにすべきか思案した。結果、ESP のうちコミュニカティブな要素の多い患者と看護師の面談場面の演習を取り入れることとした。これによりミスマッチの解消とモチベーション維持を試みたのである。ここに「ことば」を扱う教員として役割であると考えたからでもある。

４．英語教員の看護英語

授業の枠が決まれば次は内容である。目的はモチベーション維持であるが、それ自体が学習目標とはなりえない。また、専門的知識を有しない英語教員が看護用語の解説をすることも、望ましくない。コミュニカティブでありつつも専門性にあまり踏み込まないことを念頭にいくつかの既存の教科書を研究し、初診における問診やペインアセスメントに必要な日常の範囲を大きく逸脱しない英会話、そしてその英会話のときに相手への共感の態度を示せるようなやりとりを中心に学習させることとした。

５．使用教材と授業の流れ

トピックに関しては、報告者が担当している上級英語(看護用の教科書)を主に参考にした。実際の表現集はインターネット上から主に「メデェイゴ(http://medieigo.com/)」を参照した。課題として毎回、表現集を録音あるいは録画させアカデミックポータルへ投稿させた。報告者はこの単独の録画に対して発音の指導などをコメント欄に書き込んだ。さらに当事者理解の機会となることを期待して TED Talks の視聴回も設けた。これらの学習を踏まえて、学生には患者像を自分たちで考えさせ、看護師と患者双方の視点から英文を作らせ、対話にあたっては原稿をなるべく見ずにその場の流れに任せるよう指導した。学生には録画を自宅でルーブリックをもとに自己分析させた。報告者はこの対話の録画に対しては共感を示す合図をどのように送ったかなどのコメントを書き込んだ。この回数が４回あった（表１）。録画と自己分析の結果はアカデミックポータルに投稿させ、こちらで進

捗状況を確認した。

ルーブリックに関しては、英語プレゼンテーションの常套項目（発音の明瞭さ、声量、英語表現の活用の頻度、構成・ながれなど）に加え共感的コミュニケーション行動共感を示す態度の有無､相手への調整行動､追加質問の適切さ）などを振り返ることができるようにした。

表1. 授業の進め方

週	活動
第1週	表現集、作文、自宅録音
第2週	表現集、作文、自宅録音
第3週	授業内対話活動の録画、自己分析
・・・	（1～3の繰り返し）
第9週	TED Talks 視聴、討論
・・・	（1～3の繰り返し）

６．学生の自己分析の変化

ここでは学生の自己分析を２つ紹介したい（表２）。初回の対話活動（第３週）では自身の発音の明瞭さなど一人で学習をしているかのような発言をしているのが、最終回では相手の顔をどのように見たかなどの対話相手へ関心が寄せられていることがわかる。

表２．学生の自己分析（原文ママ）

例１.	
第３週	英文を覚えてただ読むだけになってしまったので**もう少し英語の発音や声の大きさスピードに抑揚をつけて会話をしたい**と思いました。
最終週	**なるべく相手の顔を見て会話をしようと努力した**けれど、動画を見返してみると紙を見ている場面が多かった。**会話の内容としては患者と看護師の会話の流れとして自然な流れでできた**と思う。もし次に演習をする時は**相手の顔を見て会話をすることを意識して**会話ができるようにしたい。
例２.	
第３週	**知らなかった単語の部分などで詰まってしまう部分が多々あったのでこれから単語の勉強をするとともに発音練習もしっかり行いたい**と思いました。そして次の会話の授業の際は**相手の目を見てしっかり自信を持って**発言できるようにしたいです。
最終週	**今回の会話練習では以前よりも長く、いろいろな質問を聞き、答えることができたと思います。しかし、やはり動画を見返すとプリントを見ていることが多く、相手の目を見て会話をする、ということができていないと思います。今後は頭にしっかり会話の内容をいれ、プリントを見ずとも会話が成立するようにしていきたいと思います。**

下線太字は報告者挿入

７．学生の感想

以下、学生の感想である（表３）。概ね、当初の目的であった科目へのモチベーションを保たせることに成功したのではないかと結論づけることのできる感想があった。

表3. 学生の感想

Q, あなたはこの演習をどう感じましたか？
グローバル化する中で将来的に必要だと思うから役立つ
スピーキング力があがる
挑戦することに繋がる
実際に起こりそうな状況の英文のため、役に立つ機会がきたら使えそうだと考える。
外人の患者さんがきた時に少しでも通じる
英語の発音の練習は実践的
最近外国人が増えてきているから
日本で使う機会もあると思うし、あったら困らない知識だから

回答期間:2022 年 9 月中旬～10 月上旬
学期終了後の成績発表後に実施

８．おわりに

本稿は、2022 年度の前期に看護学生を相手に実践したコミュニケーション演習をよりコミュニカティブなものにする試みの報告である。

学生の自己分析や感想から見られたような変化を科目担当者として歓迎したい。発音や表現集を間違えずに話せるか否かは、対話を成立させるうえでとても大切なことである。しかし、学生が演習の目的を自己研鑽にのみ焦点を当てれば、それはもう〈コミュニケーション〉演習ではない。コミュニケーションの最小単位は対人＝２者であり、自分の思いを伝える他者が不在であってはならないからだ。今後も、この点を大切に授業をデザインしていければと考えている。

謝辞

このような報告の場をいただき、英語教育実践研究会のみなさまには御礼申し上げます。

参考文献

大学コンソーシアム京都第 20 回 FD フォーラム第７分科会，2015,「大学の英語教育の課題と対策」公益財団法人大学コンソーシアム京都，(2023 年１月９日取得，https://www.consortium.or.jp/wp-content/uploads/fd/10195/07bunkakai-20thfdf.pdf）.

会員の広場

これからの英語教育のあり方を考える

北川 宣子
（（元）カリタス女子短期大学）

テクノロジーの著しい進歩により、AI が人間の能力をこえ、人間同様、あるいはそれを上回る知識や行動が可能となりつつある。英語に関しても、翻訳ソフトが今後ますます改良され、英語を学ばずとも充分に外国語で意思疎通ができるようになるのではないかという考えが片やある。確かに翻訳ソフトの精度も上がってきていることは事実である。しかし他方では、英語教育のさらなる重要性を唱える人もいる。私自身もその一人である。

横道にそれてしまうが、私は大学で英語教育に携わる前に外資系企業の秘書を経験している。その頃の秘書の業務は現在とは大きく異なっていた。上司が手紙文をディクテーションし、それを英文速記で書き取り、タイプライターで作成し、上司にサインをもらって送るという一連の作業は重要な秘書業務の一つでもあった。電話でアポイントメントを取り、スケジュール調整の連絡のやり取りもすべてアナログの作業であった。それから数十年経った今日では、秘書業務は大きく様変わりしてきた。私は長年、社団法人日本秘書協会（以下、秘書協会）に所属し、ワークショップなどにも参加しているが、現役の秘書から聞く現在の秘書の業務は以前より一層、複雑になっているように思える。今日では社内外の correspondence は、秘書の手を借りずとも上司自身が直接 email 等でやり取りすることも多くなり、秘書は、文書作成の業務に以前ほど時間をさかなくてもすむであろう。さらにスケジュール管理もパソコンによる社内の人間とのシェアが可能となり、業務が簡素化されたように見える。いずれは、秘書の役割がなくなるのではないかと思われた時期があった。私が以前、所属していた「日本秘書学会」（1981 年設は立）は 1996 年に「日本ビジネス実務学会」と名称を改め、研究対象を秘書に特化せず、広くビジネス実務へと展開していった。

その一方で先の秘書協会では、現在も秘書の資質と英語力を兼ね備えたバイリンガルセクレタリーの育成をめざし、CBS 検定（Certified Bilingual Secretary）のための講座を実施している。私もその一部を担当しているのだが、講座などで現役の秘書が力強く伝えている秘書の資質は、柔軟性、客観的な視野、人間関係調整力、コミュニケーション能力などがある。その中で特に、英語によるコミュニケーションは翻訳ソフトでも対応可能であると思われがちである。しかし円滑なコミュニケーションには、約 90 パーセントを占めるともいわれる声の抑揚や微妙な顔の表情など、ノンバーバルなコミュニケーションが大きな役割を果たし、それが欠けてしまっては味気のない機械的なやり取りとなってしまうであろう。人間同士だからこそ、わかり合える・察することができるものがある。ある時期、懸念されていた秘書という役割がなくなってしまうのではないかという考えは薄れ、現在では、人間であるからこそできる臨機応変な対応が望まれ、秘書の役割はますます重要視されているのが事実である。

それは英語教育に関しても同様であり、今後はノンバーバルな面がより強調されるべきだと考える。並行して英語だけに限らず、これまで以上に対人コミュニケーション力の教育にも力を注いでいく必要があると感じる。オンラインで画面越しのコミュニケーションに慣れてしまった今、対面で相手と接しながら話せることの喜びや大切さを私たちはこの 2 年で改めて気づかされたと思う。今後、AI のますますの進歩は否めないが、英語をただの語学のツールとしてではなく、人間関係をより円滑にし、お互いの考えや文化の理解を深め合う、血の通ったコミュニケーションのツールとして、より充実した英語教育は今後も必須と私は信じている。

【2022 年度研究会 活動報告 1】

夏季ワークショップ

日時：2022 年 8 月 29 日(月) 14：00～16：00
会場：戸板女子短期大学（田町駅より 7 分）
内容：「リーダーズ・シアターを応用した読解と音声表現指導 ―Making Words Come Alive through Readers Theatre―」
講師：浅野享三（(元) 南山大学教授）

新型コロナの影響で中止やオンライン開催になった回を挟み、対面で行われた夏季ワークショップで、久しぶりに運営委員の先生方と顔を合わせることができた。近況を教え合う時間がもっと欲しいところだったが、ワークショップ開始の時間が来た。浅野先生のリーダーズ・シアターについての発表はこれまでにも拝聴していたが、今回はパフォーマンスまでのプロセスを全員に体験してもらうワークショップということだったので、楽しみだった。

ワークショップは、①リーダーズ・シアターの概要説明、②テクストの台本化を中心とする練習 1、③個人レベルで意味を考えながら感情を込める音読練習とグループ全体をまとめる活動を中心とする練習 2、④実際のステージ発表、そして最後の⑤振り返りという流れで行われた。

リーダーズ・シアターの概要は、通常使っているテクストが利用でき、正解のない課題に取り組むことで学生たちがことばの意味を考えて学ぶようになるだけでなく、非言語コミュニケーションも身に付くというメリットと読解指導と表現音読指導が教員の重要な役割であるという説明が中心となった。実際の練習に移る前には、浅野先生の学生さんたちの実際のパフォーマンス動画を見ながら、練習や準備の注意点についてアドバイスを受けた。その後、参加者は 2 つのグループに分かれ、練習に取り組んだ。

練習の第一段階はテクストの台本化だった。台本化のポイントはテクストの仕分けということで、IRT (Institute for Readers Theatre) 方式に従って行った。

第二段階はステージ発表に向けた、個人およびグループでの音読練習を中心とする活動だった。リーダーズ・シアターでは読解に基づく意味と感情の表現が重要になるため、内容語と機能語を区別したり、vocal variety を意識するようにとの指導を受け、参加者はそれぞれのグループ内で協力し合って工夫しながら、発表の時間ギリギリまで練習に取り組んだ。

ステージでそれぞれのグループが発表したのは、James Thurber 作の“The Unicorn in the Garden”というブラックユーモアが入った短編で、別のグループのパフォーマンスを見て気付かされたり、感心したりすることが色々あった。

振り返りの中で、浅野先生から「学生ならば何週間もかかるところを、この短時間で仕上げたのは、さすが先生方です」というコメントがあったが、活動の面白さや自分のパフォーマンスの改善点を認識した参加者からは「もう少し練習してから発表したかった」「もう少し続けたい」などの声が上がっていた。

今回自分で実際に取り組んでみて、リーダーズ・シアターの素晴らしさが実感できたし、より多くの学生にも経験してほしいと思った。語学教育を外部委託したり、資格試験対策にしたりする大学が増えている現状では、このような活動の導入は簡単ではないし、様々な工夫が必要になると思うが、浅野先生の取組みを手本に、自分の授業改善に向けて努力を重ねたい。

（壁谷 一広）

＜夏季ワークショップの様子＞

【2022 年度研究会 活動報告２】

2022 年第 6 回英語教育実践研究会

日時：2022 年 10 月 9 日(土)
10：00～16：10
会場：オンライン開催
プログラム:10:00　開会の挨拶
10:05～11:35 講演
13:00～13:55 事例発表 1
14:00～14:55 事例発表 2
15:15～16:00 情報交換会
16:00　閉会の挨拶

今年度の研究会も諸般の事情から、オンライン開催となったが、コロナ禍前のように、外部から講演者をお招きして貴重なお話をうかがうことができた。ご講演くださった小澤伊久美先生は、国際基督教大学で主に留学生を対象とした教育に尽力されている方で、豊富なご経験をふまえて「大学教育における遠隔授業の現状と課題―言語教師の視点から―」という演題でお話しくださった。とくに参考になったのは、遠隔授業を行う際に利用できる各種ツールである。ズーム等の基本のプラットフォームの操作だけで満足するのではなく、遠隔授業をより効果的なものにするための工夫が求められていることを改めて実感し、遠隔授業のさらなる可能性をご教示いただいた。

午後は、２名の先生方による事例発表が行われ、各先生が、試行錯誤をされながら取り組まれている教育方法を共有くださり、有意義な時間となった。須永豊先生は、英語の歌を、リスニング教材としてだけでなく、英文法を習得するうえでの教材として利用した授業を長年展開されており、大変興味深くうかがった。「サブスク」や SNS も積極的に活用されるなど、学生寄りの学習支援の可能性もご示唆いただいた。平田亜紀先生は、看護専攻の学生を対象とした授業についてご報告くださった。授業の課題として、録音及び録画を学生に課し、自己分析も促すことで、学生を能動的で主体的な学びへと誘う工夫もされており、学生の立場を考慮したきめ細やかなご指導に刺激をいただいた。

事例発表の後は、参加者全員による情報交換会が行われた。学生たちの英語学習への動機づけや、積極的な授業参加を促す工夫など我々教員が頭を悩ませる点は共通している。日頃の悩みを共有しつつ、今後の授業で試せる方法を検討し合いながら情報を交換することができた。

（北脇　実千代）

＜第 6 回研究会の様子＞

＊＊＊ 会　計　報　告 ＊＊＊

本研究会は独立した研究会で、活動はすべて本研究会の参加費のみで運営されています。この場を借りて、2022 年度の会計報告を致します。

収入の部
74,898 円　(前年度繰越金)
11,000 円（夏季研究会参加費）

計 85,898 円

支出の部
1,626 円（夏季研究会 飲み物）
25,000 円（講演者 交通費）
30,000 円 （講演者 謝礼）

計 56,626 円

.
収入－支出 ＝ 29,272 円（次年度繰越金）

2023 年 2 月 28 日　会計報告　前田隆子
会計監査　山崎　妙

＊＊＊ 2023 年度研究会のご案内 ＊＊＊

◆夏季研究会

日時：2023 年 8 月 28 日(月)
　　15：00～17：00
会場：戸板女子短期大学（田町駅より 7 分）
テーマ：「デジタル時代の英語授業：私が困っていること」
参加費：1,000 円

上記テーマについて、意見交換を行います。関心のある方は是非ご参加ください。ご参加のお申し込みは、ホームページの申込欄をご利用ください。

◆第 7 回英語教育実践研究会

日時：2023 年 11 月 25 日(土)
　　10：00～16：00
会場：戸板女子短期大学（田町駅より 7 分）
プログラム：
　【午前】授業改善のためのワークショップ
　【午後】事例発表（募集）／情報交換会
参加費：3,000 円
懇親会の参加費：5,000 円

詳細は、本研究会ホームページをご確認ください。また、ご参加のお申し込みは、ホームページの申込欄をご利用ください。

＊＊第 7 回研究会事例発表募集のご案内＊＊

事例発表を募集いたします。皆様の日頃の授業実践の発表の場として、是非ご応募ください。

事例発表：第 7 回英語教育実践研究会
発表日時：2023 年 11 月 25 日(土)
発表時間：60 分（発表＋質疑応答）
発表会場：戸板女子短期大学(田町駅より 7 分)
発表資格：現在、大学や短期大学で英語の授業を担当している教員、及び学校の種別を問わず、効果的な英語の授業を実践している人、めざしている人
応募締切：2023 年 7 月 10 日(月)
応募方法：以下の点を明記し、本研究会ホームページの事例発表申込欄から送信

●自薦 1）応募者氏名、担当科目名
　　2）タイトル、要旨（和文 400 字程度または英文 300 語程度）
●他薦 1）推薦者氏名
　　2）被推薦者氏名
　　3）他薦の具体的な理由

問合せ先：本研究会ホームページの「問合せ」をご利用ください。

なお、事例発表の内容の詳細は、この会報『授業実践研究』の第 7 号に 2 ページ分（和文の場合 21 字× 約 150 行：原稿用紙 8 枚相当）として掲載されます。会報『授業実践研究』が、皆様のご研究の公的発表の場となり、授業改善への貴重な情報提供の場となりますことを願っております。

＊＊＊ 編　集　後　記 ＊＊＊

今年度は、夏季ワークショップにて、先生方との久しぶりの対面が叶った。コロナ禍において、オンラインでお会いすることの利便性を感じることは多々あったものの、やはり対面でお話しすることに勝るものはないと実感する機会となった。コロナ禍に入って 3 年が経過した今、対面の良さを感じるのは、他の先生方も同じなのだと本号からも確認できる。来年度は、懇親会も実施できる状況であるよう願いたい。

（北脇実千代）

授業実践研究 第 6 号
2023 年 3 月 31 日　発行
英語教育実践研究会
（旧・短期大学英語教育研究会）
編集委員会：前田隆子・中村公子・山崎妙・北脇実千代
英語教育実践研究会ホームページ
http://tan-eiken.jimdo.com/